

○山麓

山のふもと。山すそのこと。

【シ】

○G A P（Good Agricultural Practice：農業生産工程管理）

農産物の安全確保などのため、農業者・産地自らが、作物や地域の状況などをふまえ、①農作業の点検項目を決定し、②点検項目に従い農作業を行い、記録し、③記録を点検・評価し、改善点を見出し、④次回の作付けに活用するという一連の「農業生産工程委管理手法」のことです。

○シードバンク →ジーンバンク

○シイ林

シイ林はカシ林、タブ林とともに日本の暖温帯の代表的な植生です。琉球列島から太平洋側は福島県南部まで、日本海側は新潟県佐渡島にまで分布します。海岸沿いの尾根部や南向きの斜面などに成立し、タブ林より乾いた環境に多くみられます。ブナ科の常緑高木であるスダジイ、ツブラジイなどが優占し、イチイガシ、ウラジロガシ、タブノキなどが混生する森林のことです。

○ジーンバンク（遺伝子銀行）

生物多様性や農業などの分野で重要とされる生物の遺伝子資源を保存するための施設のことで、人工的な管理下で保全を図る「生息域外保全」の一つです。多くの生物資源を将来のために遺伝子レベルで保存しておくもので、植物の種子を保存しておくシードバンク（種子銀行）もその一つ。特に、農作物や薬品の開発では、既に過去のものとなった農作物の種子や民間療法として使用されている植物などを遺伝子レベルで系統保存しておき、農業や科学に役立てようというFAOなど国連機関のプロジェクトもあります。

最近では、将来の科学技術の発展に備えて、トキなど絶滅に瀕した動物の精子や卵子あるいは細胞などの形で遺伝子を冷凍保存しておき、絶滅種の復活を図る計画もあります。

○止水性

人の目では水が流れていると確認できないほどゆっくりした流れのあるところで、酸素濃度が低く、生きものは希薄であるが、その場所に生息・生育している生きもののことを止水性の生きものといいます。

○自然エネルギー →再生可能エネルギー

有限で枯渇の危険性を有する石油・石炭などの化石燃料や原子力と対比して、自然環境の中で繰り返し起こる現象から取り出すエネルギーの総称。

具体的には、太陽光や太陽熱、水力（ダム式発電以外の小規模なものをいうことが多い）や風力、バイオマス（持続可能な範囲で利用する場合）、地熱、波力、温度差などを利用した自然エネルギーと、廃棄物の焼却熱利用・発電などのリサイクルエネルギーを指します。

化石燃料や原子力エネルギーの利用は、大気汚染物質や温室効果ガスの排出、また廃棄物の処理などの点で環境への負荷が大きいことから注目されています。一方で、エネルギー密度が低く、コスト高や不安定性、また現在の生活様式を継続する中でエネルギー需要をまかないきれものではないなどの欠点もあります。

○自然共生社会

人間と地球に生きるすべての生きものがともにくらすことができ、自然からの恵みを受けつづけることができる社会のことです。空気、大地、川、海、そしてそこに生きる動植物など、すべての自然環境は地球のなかでつながっていて、どこかの環境に問題が起これば、必ずほかの環境に影響がおよびます。よって自然共生社会は、地球にくらす一人ひとりが、身近な自然環境を大切にしないと実現できません。

○自然植生

人間の影響を全く受けず、自然のままに生育する植生のことです。

○自然農法

不耕起（耕さない）、不除草（除草しない）、不施肥（肥料を与えない）、無農薬（農薬を使用しない）を特徴とす

る農法のこと。ただし、自然農法の実践者であっても手法はさまざまであり、耕起や除草を許すかどうかなどの違いがあります。

○自然林

人が手を加えていない森林。日本の自然林には、暖温帯では九州・四国・本州の関東以西および東北地方の海岸に成立するシイ・カシ・タブ林などの常緑広葉樹林、また冷温帯では本州の山地や東北地方・北海道に成立するブナ・ミズナラ林などの落葉広葉樹林、本州の亜高山・高山帯のシラビソ・オオシラビソ林やハイマツ林、北海道のエゾマツ・トドマツ林などがあります。

自然環境保全基礎調査の植生調査では1km メッシュ毎に植生自然度（この分類では植生自然度9に相当するメッシュが自然林とされている。）を調査しています。これによれば、植生自然度9のメッシュは、日本全体の17.9%しか存在していません。

日本の自然林は、太古の昔から森林が利用されてきた歴史に加えて、戦後の伐採・植林などによって、大幅に減少しています。現在、大規模な自然林は世界遺産に指定された白神山地のブナ林など、わずかに残されているだけです。

○持続可能な森林経営

森林生態系の健全性を維持し、その活力を利用して、人類の多様なニーズに持続的に対応できるような森林の取扱いのこと。

○社会貢献活動（CSR：Corporate Social Responsibility）

企業は社会的な存在であり、自社の利益、経済合理性を追求するだけではなく、ステークホルダー（利害関係者）全体の利益を考えて行動するべきとの考え方があります。環境保護のみならず、行動法令の遵守、人権擁護、消費者保護などの分野についても責任を有するとされています。この背景には、「マルチ・ステークホルダー・エコノミー」と呼ぶべき新たな時代の到来があります。最近では、大企業のみならず、市場拡大を目指す事業者や地場産品などの高付加価値化を狙う地域にもこのような動きが拡大していて、「CSR（企業の社会的責任）報告書」などを作成する事業者も増えてきています。

○種

生物分類における最も基本的な単位のことをいいます。形の特徴だけでなく、他の集団と繁殖するか、生息地域の分布や遺伝的特性の違いなども考慮して決められています。種の上には大きな分類（界、門、綱、目、科、属）があり、種の下にはさらに細かい分類（亜種など）があります。（出典：奈良県における希少野生動植物の保護のあり方に関する提言）

○周縁部

もののまわり。周辺。ふちのこと。

○周濠

古墳の周囲に掘られた堀のこと。

○種苗放流

魚介類は多くの卵を産むが、卵から稚魚になるまでの時期に、ほかの魚による捕食などにより、その多くが死亡してしまう特性があります。この時期を人の手で管理し、生存力が高い大きさまで飼育した稚魚（種苗）を天然の水域に放し、自然の生産力を活用して水産資源を増やす取組のことです。

なお、国内外来種の観点からは問題をふくむという見方もあります。

○準平原

浸食輪廻（りんね）の終地形として形成される平たんで、やや波状の小起伏のある地形。おもに河川の浸食作用が長期間続き、しかも地盤運動があまりみられない場合にできるとされています。

○循環型社会

20世紀の後半に、地球環境保全、廃棄物リサイクルの気運の高まりの中で、大量生産・大量消費・大量廃棄型の社会経済のあり方に代わる資源・エネルギーの循環的な利用がなされる社会をイメージした言葉として使われるようになってきました。「循環型社会形成推進基本法」では、循環型社会を「天然資源の消費量を減らして、環境負荷をで

きるだけ少なくした社会」と定義しました。循環型社会を構築する方法として、(1) ごみを出さない、(2) 出たごみはできるだけ利用する、(3) どうしても利用できないごみはきちんと処分する、の3つを提示しています。

○順応的管理（アダプティブマネジメント、適応的管理）

不確実性を伴う対象を取り扱うための考え方・システムで、特に野生生物や生態系の保全管理に用いられます。

当初の予測がはずれる事態が起こりうることを、あらかじめ管理システムに組み込み、常にモニタリングを行いながら、その結果に合わせて対応を変えるフィードバック管理（順応性）を行うことが必須となります。また、施策は多くのリスクを伴うので、その説明責任を果たす義務も必要となります。順応性と説明責任を備えた管理を順応的管理といいます。

○照葉樹林（常緑広葉樹林）

シイ、カシ、タブなどの常緑の広葉樹が優占する森林。

○常緑樹 →常緑針葉樹林

常緑針葉樹が優占する森林。針葉の表面は、蝟や脂肪酸を多く含んだ硬いクチクラ層が発達しているため、耐寒性や耐乾性がある。このため、世界的には亜高山帯から高緯度地方の低地や山地、熱帯の山地まで広く分布しています。日本では、森林限界（高木が生える限界）より高い高山帯ではハイマツ林になります。

本州の亜高山帯上部ではシラビソやオオシラビソ林、下部ではコメツガ林になる。高緯度地方で代表的なのは亜寒帯針葉樹林（北方針葉樹林）で、日本では北海道のエゾマツやトドマツ林とアカエゾマツ林が相当します。スギ林、ヒノキ林、サワラ林は温帯性の常緑針葉樹で、クロマツ林、アカマツ林は暖帯性の常緑針葉樹林です。針葉は分解しにくいので、林床には未分解の「粗腐植」が厚く堆積しています。常緑針葉樹林はマツ林を除いて林内が暗く、林床植物の種類が少なくなっています。

○植生

ある地域を覆っている植物体の総称のこと。

○食虫植物

主として葉や茎の表面で昆虫を捕らえ、殺して分解し、そこから何らかの栄養分を取る植物のことで、葉緑素を持ち、独立栄養生活をしながら、葉が変形し発達した捕虫器によって小動物を捕まえ、自らが分泌する消化酵素により、又は共存するバクテリアなどの働きをかりて、捕らえた小動物の体を分解し、窒素やリン酸などを取り込んで、養分を補うことの出来る特別な生活様式を兼ね備えた植物。

○植物群落

同一場所である種の単位性と個性を持って一緒に生活している植物群を指す植生の単位。その大きさや広がりについて、特に規定はない。同じような立地では、相観・構造・組成などがよく似た群落がある程度の再現性を持つてみられる。

○植物相（フロラ）

特定の地域に生育する植物の種類組成。

「動物相」（特定の地域に生息する動物の種類組成）と合わせて、「生物相」（特定の地域に生育・生息する動植物の種類組成）を構成する。

「植生」が「植物群落」によって類型的に地域の特徴を表すのに対して、植物相は地域に生育する全ての植物を同定して、種名などを記した種のリストで表す。日本は亜熱帯と亜寒帯にまたがっているため、多様な植物相が見られる。

○食物連鎖

生物群集にみられる“食う、食われる、分解する”といった種間関係をあらわす概念。生物間の物質・エネルギー流におけるつながりを示し、最近では食物連鎖全体の構造を表す食物網（Food Web）という言葉も使われます。

食物連鎖は大きく捕食系、腐食系、分解系に分けて考えられます。捕食系では、捕食、被食、寄生関係によって、栄養段階の上位の生きものに物質・エネルギーが供給されるほか、その死骸や排泄物は腐食系や分解系によって分解されます。腐食系の生きものは、死骸や排泄物を食べ無機物化するほか、自ら餌となり捕食系の中に組み込まれます。分解系の生きものは、捕食系・腐食系の生きものの死骸や排泄物を分解し、生成された物質は植物の栄養と

なります。

捕食関係の上位の生物体内に重金属や環境化学物質が蓄積されていく現象は生物濃縮と呼ばれます。食物連鎖のバランスが保たれることは、生態系が維持されていく上で不可欠なものです。

○針広混交林

針葉樹と広葉樹が混じり合った森林のこと。

○人工林

苗木の植栽や、播種、挿し木などにより人が更新させた森林。自然散布された種子や萌芽などにより更新した林は、間伐や枝打ちなどの人手が加わっても人工林とは呼ばず、天然林と称される。スギ、ヒノキ、マツ類、カラマツなどが代表的な樹種で、2002年度現在、日本の森林の約36%を占めています。

人工林は経済的価値、利用価値のある樹種を目的に合うように仕立てるため、一般に効率よく用材などを生産できます。しかし、一方で、同齢の人工林は同じ大きさの木が同じ間隔で植えられて生育するので、管理が悪いと共倒れを起こしやすい。また、植生が単純なので病虫害が発生しやすく、その回避のためにも管理が必要です。若齢の林では林内が暗く、林床植生の生育が悪く、表層土壌の流亡が起きやすい。また、皆伐し、一斉に植栽して造る人工林は生物の多様性が低いという問題もあります。

○侵略的外来種

外来種の中で、地域の自然環境に大きな影響を与え、生物多様性を脅かすおそれのあるもの。

具体的な例としては、沖縄本島や奄美大島に持ち込まれたマングース、小笠原諸島に入ってきたグリーンアノールなど。グリーンアノールは小型のトカゲで、昆虫などを主食にしている、この小笠原固有の昆虫の多くがグリーンアノールに食べられてしまい、絶滅の危機に瀕しているもの、既に絶滅してしまったかもしれないものが多いです。

「侵略的」というと、何か恐ろしい・悪い生きものなのか？と思われがちですが、本来の生息地ではごく普通の生きものとして生活していたものですので、その生きもの自体が恐ろしいとか悪いというわけではありません。たまたま、導入された場所の条件が、大きな影響を引き起こす要因を持っていたに過ぎません。

例えば、日本ではごく普通にどこにでもいるコイという魚や土手などに生えているクズという植物でも、本来生息・生育していなかったアメリカでは、「侵略的外来種」といわれています。

○森林環境教育

森林内での多様な体験活動などを通じて人々の生活や環境と森林との関係について学ぶことにより、「地球温暖化防止」など森林の多面的機能や森林の整備と森林資源の循環利用の必要性などに対する理解を醸成するとともに、子どもたちの「生きる力」をはぐくむための取組み。

○森林施業

目的とする森林を育成するために行う造林、保育、伐採などの一連の森林に対する人為的行為を実施すること。

○森林の持つ多面的機能

地球温暖化の防止、国土の保全、水源かん養、自然環境の保全、良好な景観の形成、文化の伝承、木材の生産などの森林が持つ多面にわたる機能。

○森林の有する公益的機能

水源かん養機能、山地防災機能、生活環境保全機能など、多面的機能のうち木材生産機能を除いたもの。

○森林セラピー

森林の地形や自然を利用した医療、リハビリテーション、カウンセリングなど、森林環境を総合的に使いながら健康を増進していく取組で、森林レクリエーションを通じた健康回復・維持・増進活動です。

ヨーロッパでは、森林と温泉地を活用した森林療法の実践例があり、中でも、ドイツには、「クナイプ療法」という120年の歴史を持つ自然療法もあります。

近年、我が国でも注目されてきている具体的な取組には、次のようなものが挙げられます。(1) 森林浴を代表とした森林レクリエーション、(2) 樹木や林産物を活用した作業療法(園芸療法も含む)、(3) 森林内を歩きながらのカウンセリングやグループワーク、(4) 森林の地形や自然を利用した医療リハビリテーション、(5) 森林における幼児保育、(6) 林産物を利用したアロマセラピー。